

# 徒然草は語る！ “兼好法師の世界観”

～ 兼好法師の”人間味あふれる”多面的思考に触れよう ～

- ◆出 展 『徒然草』 兼好法師
- ◆出題校 早稲田大学、立教大学、国立島根大学 など多数
- ◆時 代・ジャンル 鎌倉末期 随筆

中学・高校の国語（古文）の授業で、『徒然草』を学習したことのない生徒は、おそらくいないでしょう。東大合格者が多いことで知られる関西のある進学校は、高2の1年間をかけて、『徒然草』を学習するそうです（ちなみに高3では『源氏物語』）。かくいう私自身も、かつて高2向けの古文の文法を初歩から学ぶテキストで、本文・例文もすべて『徒然草』というテキストを作成し、講座を開講しました。なぜ、『徒然草』が、いいのか？それは、文語文法や基本単語を初歩から体系的に学習するには、最適な例文が多くあるからです。市販されている多くの古語辞典の例文も『徒然草』が多いのです。

さて、その内容はというと、作品世界を語るとき「無常観」という言葉が使用されることからわかるように、高校生が楽しく読めるというものでは確かにありません。

「世はさだめなき、こそいみじけれ。（世は無常だからこそ、すばらしいのだ）」

という七段の文は典型的でしょう。表面的な理解をすると、読み手は、「どうせ、がんばったって楽しめるのは、一時的なことなのだから、今が楽しければいい」という刹那主義や、「がんばったってたかが知れている」という虚無主義に安易に陥ってしまいがちです。

一方で、「同じ心ならん人と……」で始まる十二段は、「真に心を同じくする友はいないから、人と対話していてもどこか寂しい」と、現代人と同じように人間関係に悩み、孤独をかみしめている一人の人間としての兼好を私たちは発見することができます。

この章段は、多用されている助動詞「む」の用法（推量、意志、適当・勧誘、婉曲・仮定の意味の識別）の確認にもなります。

その他の章段にも、兼好の多面的思考に触れることのできる部分がたくさんあります。ぜひ、教科書で学習した部分を読み直したり、それ以外の章段にも直接、原典にあたってみてください。

（国語科主任：八木）